

# TOP MUSEUM

東京都写真美術館  
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM

153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内  
Yebisu Garden Place, 1-13-3 Mita Meguro-ku Tokyo 153-0062  
TEL 03-3280-0099 FAX 03-3280-0033  
www.topmuseum.jp

2020-09-11

## 生誕 100 年 石元泰博写真展 生命体としての都市

Ishimoto Yasuhiro Centennial: The city brought to life

2020 年 9 月 29 日 (火) - 11 月 23 日 (月・祝)



結果がどうなるかわからないものに、  
挑み続けるのはしんどいけれど、面白い。  
だから、やめられない。

石元泰博『色とかたち』(平凡社、2003)より 一部抜粋

《シカゴ 街》1959-61 年 東京都写真美術館蔵

### 展覧会概要

東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館では、Tokyo Tokyo FESTIVAL の一環として、「生誕 100 年 石元泰博写真展 生命体としての都市」を実施いたします。

石元泰博 (1921-2012) は日本の写真史上における重要な写真家の一人であり、同時代の写真表現、デザイン、建築などの国際的な動向に関わった稀有な表現者でした。その功績は文化功労者への選出や旭日重光章の受章 (追贈) などを通じて広く讃えられています。

本展は、シカゴと東京を往還することで構築された独自の都市観にフォーカスし、ミッドキャリアから晩年に至る石元作品を選び、石元泰博の仕事をととして生命体で紡がれた都市を展覧する初めての試みです。

## 本展のみどころ

### 生誕 100 年を迎える石元泰博の過去最大規模の回顧展

日本を代表する写真家のひとり、石元泰博は 2021 年に生誕 100 年を迎えます。これを記念して、東京都写真美術館、高知県立美術館、東京オペラシティ アートギャラリーの 3 館共同企画「生誕 100 年 石元泰博写真展」として、石元泰博の多彩なキャリアを見渡す過去最大規模の回顧展です。

### 写真家・石元泰博の「生命体としての都市」に向けた孤高のまなざし

「生誕 100 年 石元泰博写真展」は東京都写真美術館による石元の“都市への視線”から開幕します。

石元がシカゴと東京を往還することで構築された石元独自の都市観にフォーカスし、ミッドキャリアから晩年に至る作品に着目します。本展は、シカゴや東京の街、都市に暮らす人々の風景やポートレート、色彩豊かな多重露光など、写真家・石元泰博の多角的な仕事を通して写真表現として作り上げられた、生命体のように練り上げられた都市へのまなざしを選びすぐった 166 点で紹介합니다。

生命体としての“都市”の記録…そこに見えてくるのは、あくまでも明晰でありながら、驚くべきエネルギーを内包し、どこかミステリアスな雰囲気漂わせる、石元にとっての根源的な“都市”のイメージといえるだろう。

飯沢耕太郎 『『造形』を超えて—石元泰博の軌道』、『石元泰博（日本の写真家 26）』（岩波書店、1997）より

### バウハウス直系の構図をとおした写真表現

石元は、1948 年、シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（以下 ID）\*で写真を学び、同時代の写真表現、デザイン、建築など多分野にわたって影響を与え続けた稀有な表現者でした。

モダン建築によって都市の骨格が形成された頃に撮影された〈シカゴ、シカゴ〉をはじめ、日本建築の中にモダニズムを切り取った〈桂離宮〉、視覚芸術として高度に洗練された表現を用いた〈多重露光〉など、石元が影響を受けたモダンデザインの理念が写しだされた独自の写真表現による斬新な美しさは、一般の方はもとより、デザインや建築を志す人たちにとっても、新たな示唆を与える作品群です。

\*インスティテュート・オブ・デザインは、画家であり写真家でもあるラースロー・モホイ＝ナジによって 1937 年に設立されたデザイン学校（通称ニュー・バウハウス）。石元が通っていた時期にイリノイ工科大学の一部となった。

…己の琴線にふれたものは、どこまでも追求したいという撮影対象の幅の広さは、これもニュー・バウハウスで身につけた「既成概念にとらわれず対象を見る」という〈もの〉への接し方のせいでしょう。

石元滋「石元泰博とともに」、石元泰博『刻』（平凡社、2004）より \*石元滋は、石元滋子の筆名

## 展示構成と出品点数 [予定]

シカゴ、シカゴ [34 点] / 東京 [63 点] / 桂離宮 [18 点] / 多重露光 [14 点] / 刻(とき) [12 点]  
/ シブヤ、シブヤ [25 点] 計 166 点

## 主な作品紹介

石元泰博は『シカゴ、シカゴ』（美術出版社）、『都市\*\*（映像の現代8）』（中央公論社）で街と生きる人々へ視線を向け、独自の都市観を世に問いました。そして、物質や空間のミクロな断片を有機的に積み重ねた『刻（とき）』に昇華し、往来する人々を切り撮る『シブヤ、シブヤ』へと拡張しました。この挑戦を支えたのが1959年頃から取り組み続けた多重露光による作品です。これらの多角的な仕事を通して、石元は写真表現として「生命体としての都市」を作り上げました。\*\*英題は *Tokyo*。

### ■ シカゴ、シカゴ

1948年、シカゴのIDで写真を学びはじめた石元の勉強ぶりは、「1日29時間写真に向かう」と形容され、学内最高賞を2度も受賞して1952年に卒業。1958年、再びシカゴを訪れた石元は「己のシカゴ」を捉えるべく、予定撮影期間の1年を3年に延長して制作に没頭します。その撮影数は6万カットに及び、写真集『シカゴ、シカゴ』が誕生しました。本展では、さらに『シカゴ、シカゴ その2』（1983年、キヤノン株式会社）所収の作品も含め、原点であるシカゴで捉えた石元の都市像に注目します。



《シカゴ 街》 1958-61年 東京都写真美術館蔵



《シカゴ こども》 1958-61年頃 東京都写真美術館蔵

### ■ 東京



石元は1960年代にシカゴから東京に移って以降、亡くなるまでの約60年間は東京を拠点に撮影し続けました。

石元の写真表現は「造形的」としてしばしば語られますが、無機的な画面構成のみを追い求めたわけではなく、《東京 こども》(No.2-12) や《東京 街》(No.2-9) のように、都市を生きる人々を捉えた作品を多く残しました。

舞台をシカゴから東京へ移しても、人物、建築、自然、それらが交わった痕跡も等価にとらえるという石元の視線は変わることがありませんでした。本展では、山手線の全29駅\*\*\*の周辺を8×10インチ判の大型カメラで撮影した〈山の手線・29〉シリーズも併せて展示し、東京を正面から捉えた作品群を展覧します。

\*\*\*石元が撮影した1980-90年代当時。

《東京 街》 1964-70年 東京都写真美術館蔵

## ■ 桂離宮



《桂離宮 中書院東庭から楽器の間ごしに新御殿を望む》

1981-82年 東京都写真美術館蔵

桂離宮をとらえた一連の作品は、石元の代表作のひとつです。最初の撮影は1953年から1954年、二度目は1981年から1982年で、30年の時を経て再挑戦しています。最初の撮影は丹下健三らと共著の『桂—日本建築における伝統と創造』（造型社）として上梓されました。二度目の撮影は1983年に磯崎新、熊倉功夫らとの共著で『桂離宮 空間と形』（岩波書店）として発表されました。本展では、50年代のオリジナルプリントに加え、80年代に撮影された作品を石元本人の許可を得て写真家・原直久がプリントした作品も併せて展示し、30年の時を経て変容した石元の視線を追体験できる構成です。

## ■ 多重露光

1959年頃から制作され続けた色彩豊かな多重露光によるシリーズは、季刊『approach』誌（竹中工務店）の1973年春号から表紙を飾り続け、惜しまれながら他界した2012年冬号まで継続しました。樹木や構造物、色紙、金属板、時には自ら描いたドローイングをモチーフに、レンズフィルターやゼラチンフィルターを駆使して制作されたこのシリーズは、IDで体得したモダンデザインの限界を緩やかな時をかけて乗り越えた知的な連作です。本展では、制作に使用された金属板やモチーフとなった自筆のドローイングも併せて展示し、石元による造形写真の極致を検証します。



《色とかたち》

2008年 東京都写真美術館蔵

## ■ 刻（とき）



《人の流れ》2001年 高知県立美術館蔵

都市を往還しながら、街とその空間に生きる人々へ向けられた石元の視線は、1980年代にニューヨークのセントラルパークで、濡れた落ち葉へと向けられます。この落ち葉に始まり、空き缶、雪のあしあと、雲、水、人の流れをモチーフとして撮影されたこれらの作品群によって、〈うつろい〉というシリーズが形作られました。そしてこのシリーズは、2004年に写真集『刻moment』（平凡社）へと昇華されました。本展では、写真集の上梓以前に収集された東京都写真美術館の収集作品のほか、高知県立美術館蔵の収集作品を加えてミクロな断片と俯瞰的な視点の両面から、都市の再構築へ挑んだシリーズを展覧します。

## ■ シブヤ、シブヤ

本シリーズは渋谷駅前のスクランブル交差点で信号待ちをする人々を捉えており、2002年から撮影が始まりました。「ノーファインダー」と呼ばれる、ファインダーを通して被写体を確認することなく撮影する手法がとられています。圧倒的な撮影技術で制作し続けた石元が「偶然」という写真特有の要素を用いて、世代が隔たる被写体に挑んだシリーズです。石元が85歳という年齢にあって新たな手法に取り組み、変容し続ける「生命体としての都市」を記録した作品群を展覧します。

《シブヤ、シブヤ》2003-06年 高知県立美術館蔵



## 作家紹介

### 石元泰博 Ishimoto Yasuhiro [1921—2012]



《セルフ・ポートレート》  
1975年  
高知県立美術館蔵

1921年アメリカ合衆国サンフランシスコに生まれる。3歳のとき両親の郷里である高知県に戻り、1939年高知県立農業高校を卒業。同年に渡米し、終戦後は、シカゴのインスティテュート・オブ・デザイン（通称：ニュー・バウハウス）で、写真技法のみならず、石元作品の基礎を成す造形感覚の訓練を積む。1956年川又滋子（筆名：滋）と結婚。1969年に日本国籍を取得。丹下健三、磯崎新、内藤廣など日本を代表する建築家の作品を多く撮影したことで知られる。1983年に紫綬褒章、1993年に勲四等旭日小綬章を受章、1996年に文化功労者となる。2006年、高知県立美術館に作品や資料の寄贈が決定。3万5千点におよぶプリント作品のほか貴重な資料が収蔵されている。これら石元コレクションを社会の共有財産として管理し、研究・普及するため2013年に「石元泰博フォトセンター」が発足、現在に至っている。



## 展覧会カタログ (予定)

『石元泰博 生誕100年』(平凡社、2020年9月29日発行)

定価：3,300円(税抜)、ページ数：約300ページ

テキスト：磯崎 新(建築家)、森山明子(武蔵野美術大学 教授)

天野 圭悟(高知県立美術館 石元泰博フォトセンター 学芸員)

朝倉 芽生(高知県立美術館 石元泰博フォトセンター 学芸員)

福士 理(東京オペラシティ アートギャラリー 学芸員)

藤村 里美(公益財団法人東京都歴史文化財団 学芸員)

## 「生誕 100 年 石元泰博写真展」共同企画情報

「生誕 100 年 石元泰博写真展」は東京都写真美術館、高知県立美術館、東京オペラシティ アートギャラリーの三館共同企画として、東京都写真美術館の「生命体としての都市」を皮切りに、東京オペラシティ アートギャラリーで、「伝統と近代」をキーワードに被写体に着目した展覧会を開催します。その後、高知県立美術館にて写真家・石元泰博の全貌を振り返る回顧展を行います。

東京オペラシティ アートギャラリー「生誕 100 年 石元泰博写真展 伝統と近代」

会期：2020 年 10 月 10 日（土）－12 月 20 日（日）

<https://www.operacity.jp/ag/> TEL: 03-5777-8600（ハローダイヤル）

高知県立美術館 「生誕 100 年 石元泰博写真展」

会期：2021 年 1 月 16 日（土）－ 3 月 14 日（日）

<https://moak.jp/> TEL 088-866-8000

## 相互割引

東京オペラシティ アートギャラリー「生誕 100 年 石元泰博写真展 伝統と近代」の入場券をご提示いただくと、本展入場券が通常料金が 2 割引になります（他の割引との併用不可、ご本人様 1 回限り有効）。また、東京オペラシティ アートギャラリーの同展へご入場の際に本展入場券をご提示いただいた場合は、割引料金（200 円引き）になります。さらに相互割引対象者には、高知県立美術館での「生誕 100 年石元泰博写真展」割引特典付き特製ポストカード（各館先着 10,000 名様）をプレゼントいたします。

## 開催概要

展覧会名 [和] 生誕 100 年 石元泰博写真展 生命体としての都市

展覧会名 [英] Ishimoto Yasuhiro Centennial : The city brought to life

主催 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館、読売新聞社、美術館連絡協議会

協賛 ライオン、大日本印刷、損保ジャパン、日本テレビ放送網

共同企画 高知県立美術館、東京オペラシティ アートギャラリー

会期 2020 年 9 月 29 日（火）－11 月 23 日（月・祝）

会場 東京都写真美術館 2 階展示室

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内

電話 03-3280-0099

開館時間 10:00－18:00 ※入館は閉館の 30 分前まで

休館日 毎週月曜日（ただし 11 月 23 日[月・祝] は開館）

観覧料 一般 700（560）、大学・専門学校生 560（440）、中高生・65 歳以上 350（280）

※10 月 1 日（木・都民の日）は入場無料 ※（ ）は東京オペラシティ アートギャラリーとの相互割引、当館の映画鑑賞券ご提示者、各種カード会員割引 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料

## このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版をデータにてご用意しております。広報担当までご連絡ください。

- ・図版の無断掲載はご遠慮ください。また、トリミング、文字掛け等の加工はできません。
- ・図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよび、以下の和英どちらかのクレジットの表記をお願いします。

©高知県, 石元泰博フォトセンター

©Kochi Prefecture, Ishimoto Yasuhiro Photo Center Photo Center

- ・図版はすべて ©高知県, 石元泰博フォトセンター
- ・制作年代について、撮影時期が期間内に明確な場合はその期間を示し、推定期間の場合は「頃」を付しています。
- ・本展は、やむを得ない事情により内容を変更する場合があります。

## 東京都写真美術館

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内  
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM 電話 03-3280-0034 / FAX 03-3280-0033 / [www.topmuseum.jp](http://www.topmuseum.jp)

展覧会企画 藤村里美

展覧会担当 山田裕理 [y.yamada@topmuseum.jp](mailto:y.yamada@topmuseum.jp)

三井圭司 [k.mitsui@topmuseum.jp](mailto:k.mitsui@topmuseum.jp)、遠藤みゆき [m.endo@topmuseum.jp](mailto:m.endo@topmuseum.jp)

広報担当 平澤綾乃 池田良子 岡田なつき [press-info@topmuseum.jp](mailto:press-info@topmuseum.jp)